

## 住友重機械工業追浜造船所浦賀艦船工場について

京浜急行浦賀駅を出ると、目の前に造船所らしき工場跡地が見える。少し歩くと古びたドックとクレーン、壊れかけた工場建屋も見える。ここはかつて帝国海軍や海上自衛隊の艦艇、大型練習帆船海王丸や青函連絡船など数多くの艦船を建造した住友重機械工業追浜造船所浦賀艦船工場（住重浦賀）のあった場所である。

住重浦賀は、平成14年に石川島播磨重工（IHI）と住友重機械工業の艦船部門が合併されIHIマリンユナイテッドが設立されたことを契機に、同年3月IHI東京第1工場が閉鎖されたのに引き続き平成15年3月に閉鎖された。

さて、住重浦賀の歴史は古く、この地に造船所が設立されたのは嘉永6（1853）年11月であり、江戸幕府の造船所として操業を開始した。米国のペリー艦隊が浦賀に来航したのが同年6月であることから、幕府がいかに慌てて造船所を設立したかがうかがえる。

浦賀造船所は明治9年に一旦廃止されるが、明治30年に民間造船所「浦賀船渠」として再出発した。浦賀船渠はその後大東亜戦争が終結するまでの間、主として帝国海軍駆逐艦建造造船所として38隻の駆逐艦を建造し、大阪の藤永田造船所とともに「西の藤永田、東の浦賀」と呼ばれていた。



1910年頃の浦賀船渠（右奥のドックは現存する）

終戦後は、敷設艦「えりも」（27AMC）を受注して艦艇建造を再開、昭和44年には住友重機械工業と合併、住友重機械工業追浜造船所浦賀艦船工場となった。以後、平成15年3月に工場を閉鎖するまで、海自艦艇26隻建造した

(DD×13、DE・PG各3、PC×2、AMC・AO・ASE・ASR・ATS各1)。建造艦種を見ると、護衛艦のほかに特殊な艦艇を多く建造しているのがわかる。特にミサイル艇(PG)は我が国初の hidrofoil型ミサイル艇として、艇体を回転して溶接できる特殊な建造治具を用いて建造した珍しい艇であった(海上自衛隊は当初6隻整備予定であったが3隻で打ち切ったため、設備投資が回収できなくなった会社との間で問題になった)。

さらに試験艦「あすか」(04ASE)も住重浦賀で建造している。本艦は技本(当時)が開発した大型ソーナー(「ひゅうが」型に装備)を試験するため艦首に30m以上の超大型ソーナードームを有する当時としては極めて特殊な船体形状であった。

民間船舶では前述の大型帆船や青函連絡船など、こちらも特殊な船舶を得意としていた。

現在、住重浦賀の跡地には造船所の設備がほぼ残されたままとなっている。工場設備のうち、第1号ドックは世界に4か所しか現存しないレンガ積みドライドックであり(もう一か所は同じ浦賀の川間地区にあり、現在ヨットハーバーになっている)、ドックサイドクレーン、ポンプ施設とともに平成19年に近代化産業遺産に認定された。第1号ドックと周辺施設は令和3年3月に住友重機械工業から横須賀市に無償で寄付された。横須賀市はこのドックを観光施設として活用することとしている。

住重浦賀が元気な頃、浦賀駅周辺は造船所敷地を取り巻くように商店街があり、活気に満ちていた。また、毎年工場主催の「住重駅伝」が浦賀周辺をコースに開催され、従業員のみならず、ぎ装員、修理艦乗員、そして横須賀造修所からもチームを出して出場、良い意味で官民の交流を深めていた。

そういえば、住重浦賀には有名な受付の女性がおられた。住重浦賀にお世話になっていた装備幹部、技官なら誰でも知っているはず。IHIMUになってからも磯子にしばらくいらっしやっただが、確かお名前は・・・。

※ 参考文献：「住友重機械工業(株)浦賀艦船工場」  
(富田悠一著：日本造船学会誌)



在りし日の住重浦賀工場（平成4年）



現存する第1号ドック